

第二 1907年「癩予防二関スル件」

の、人々の宗教心という曖昧なものに依存する中世の救済に対して、近世という歴史段階が達成した一つの成果ではあった。

四 文学史料の分析

次に文学史料から、人々の「癩」病観を分析する。ここでは「しんとく丸」という少年の、「癩」の罹患と治癒をめぐる物語を中心に扱った。

1. 「しんとく丸」説話と「癩」

『摂州合邦辻』^{せつしゅうがっほうがっじ}は現在でも上演される人形浄瑠璃の人気演目の一つである。菅専助・若竹笛躬^{かえみ}の作品で、1773年に大坂で初演された。この作品の主軸は主人公俊徳丸^{しゅんとくまる}の「癩」の罹患と治癒にあり、そこに継母の邪恋や跡目相続を巡る陰謀が絡んで話が展開する。「合邦住家の段」は作品のクライマックスで、俊徳丸の「癩」が継母の生き血を飲むことによって、瞬時に治るという場面である。俊徳丸の人形は、盲目で赤い斑点のある面をつけているが、生き血を飲むシーンで素早く面をとり、もとの美少年の顔に戻るのである。

「癩」にかかった主人公「しんとく丸」をめぐる文学的系譜は、中世まで遡ることができる。ここでは、中世末の説経節から江戸時代の浄瑠璃へと連なる「しんとく丸」の一連の作品を通じて、「癩」の扱われ方の変化を検討し、その背景にある庶民の「癩」病観が変化する状況について考察する。

もちろん劇場空間で展開される「癩」病観は、現実の庶民の「癩」病観そのままではない。だが庶民の意識をくみ取りながら、そこから乖離することなく、さらにそれらを劇的に展開させるのが浄瑠璃作者の腕の見せ所であり、過去の人気作品を下地にして、新作を練っていくという江戸時代の浄瑠璃の制作手法を考慮すると、近世を通じて、一つの作品から次の作品へ、受け継がれ、展開されていくモチーフは、当時の人々の「癩」病観をそれなりに反映していると考えてよいだろう。

2. 「しんとく丸」の文学史的系譜

「しんとく丸」をめぐる説話の文学的系譜を主要な作品で示すと、以下のようになる。

- 1) 謡曲弱法師^{よわぼし} (15世紀前半)
- 2) 説経節『しんとく丸』(中世末)
佐渡七太夫正本 正保5(1648)年版二条通九兵衛版
江戸うろこがたや孫兵衛版 天和・貞享期(1681-1687)
- 3) 浄瑠璃『弱法師』、元禄7(1694)年初演、近松門左衛門作
- 4) 浄瑠璃『莠伶人吾妻雛形』^{あはばのれいじんあづまのひながた}、享保18(1733)年初演、並木宗輔・並木丈輔作
- 5) 浄瑠璃『摂州合邦辻』安永2(1773)年初演、菅専助・若竹笛身弓作

以下、それぞれの作品の簡単なあらすじを、「癩」に関連する部分を中心に紹介しておく。